みはら歴史紀行
美原のあけぼの

古くから交通の要衝となり、渡来文化をいち早く取り入れて、独自の文化を発展させ、日本全体の歴史にも大きな影響を及ぼしてきた郷土の歴史を、いま見つめなおしてみましょう。

旧石器時代の石槍など（左2個:ナイフ形石器）（右4個:有舌尖頭器）

今から1万2千年より以前は氷河期で、考古学では旧石器時代と呼ばれています。このころ、日本はまだ大陸と陸続きで、ナウマン象などが狩猟の対象になっていました。当時、美原を含む近畿圏では、二上山付近から産出するサヌカイト（ひとことコラム参照）を利用して石器を作っていました。

氷河期が終わると、気候が温暖になり、陸続きだった日本も列島となり、海が陸地の奥にまで入り込んできたことにより、人びとの生活も大きく変わりました。現在の大阪平野は、今からおよそ1万年ほど前には、上町台地が半島のように海に突き出しているだけで、大阪湾も現在の大和川のすこし北まで入り込んできたと考えられていました。美原も現在と比べると、海にずっと近かったのです。

ひとことコラム
サヌカイト

全国でも二上山と四国・讃岐地方を中心に、瀬戸内海地方だけに産出する安山岩の一種。打力で破壊しやすく、用いて硬く、扁平な割れ方をするため、石斧や矢じりを作るのに適していた。石を叩くと「カンカン」と澄んだ音がするので、カンカン石とも呼ばれる。

この美原に私たちの祖先が住み着いたのは、およそ2千年前と推察されます。彼らは、羽曳野丘陵（平尾山）の西側の川に沿った小高いところに住み、魚をとったり、貝をひろったり、木の実を集めたり、手に弓や槍を持って獲物を求めて駆け回り、鹿やうさぎなどを獲って、生活をしていたことでしょう。

縄文時代の終わりごろに、農耕文化が日本に伝わり、やがて定住・農耕の時代へと進んでいきます。美原ではまだ弥生時代の水田も住居跡も発見されていませんが、弥生時代の美原は、狩猟などが行われていた場所で、人びとは松原などの周辺地域に住んでいたと考えられます。

古墳時代になると、前方後円墳と呼ばれる古墳が造られ、全国に広まります。5世紀ごろの美原では、丹比氏の首長の墓と思われる黒姫山古墳が築造されました。現在、美原に残っている古墳は、黒姫山古墳だけになってしまいましたが、発掘調査で、太井遺跡から次々と小規模の古墳が発見されています。

古代の大阪（5世紀頃）

前方部竪穴式石室

復元された甲冑

24領の鉄製甲冑が出土

黒姫山古墳

昭和32（1957）年　史跡指定
昭和53（1978）年　追加指定

三角板鋲留襟付短甲

短甲は、長方形や三角形に切った大きめの鉄の板を、革や鋲で止めたよろいで、主に胴の部分を防御するためのもの。

美原町のほぼ中央、国道309号と府道泉大津美原線に接して、5世紀中頃に軍事や外交などに携わっていた丹比氏の首長の墓とされる黒姫山古墳があります。この古墳は、前方後円墳で二段に築造され、その周囲には2つの濠があって（1つは現存）、少なくとも6基の陪塚を伴っていたと伝えられています。

戦後間もなく、故末永雅雄博士らによって発掘調査が行われていましたが、後円部の以外埋葬施設はすでに盗掘などによって壊されていました。しかし、偶然にも前方部からは竪穴式石室が良好な状態で発見され、そこには、甲冑が24領出土し、また襟付短甲があったことで日本中の話題になり、現在でも考古学上は非常に貴重な資料となっています。

黒姫山古墳の石室復元模型

黒姫山古墳の周囲には、濠が掘られ、池のようになっていますが、さらに外側に「周庭帯」と呼ばれる部分が存在します。周庭帯は、古墳を立派に見せるために造られたものです。

現在、墳丘部は森のようになっていますが、築造当時、赤い埴輪が整然と並べられており、斜面に敷き詰められた白い葺石とのコントラストは、さぞ見る人を圧倒したことでしょう。

円筒埴輪（黒姫山古墳出土）

ひと・みはら

黒姫山古墳の発掘に参加して

大阪府文化財保護委員
光田 哲也さん

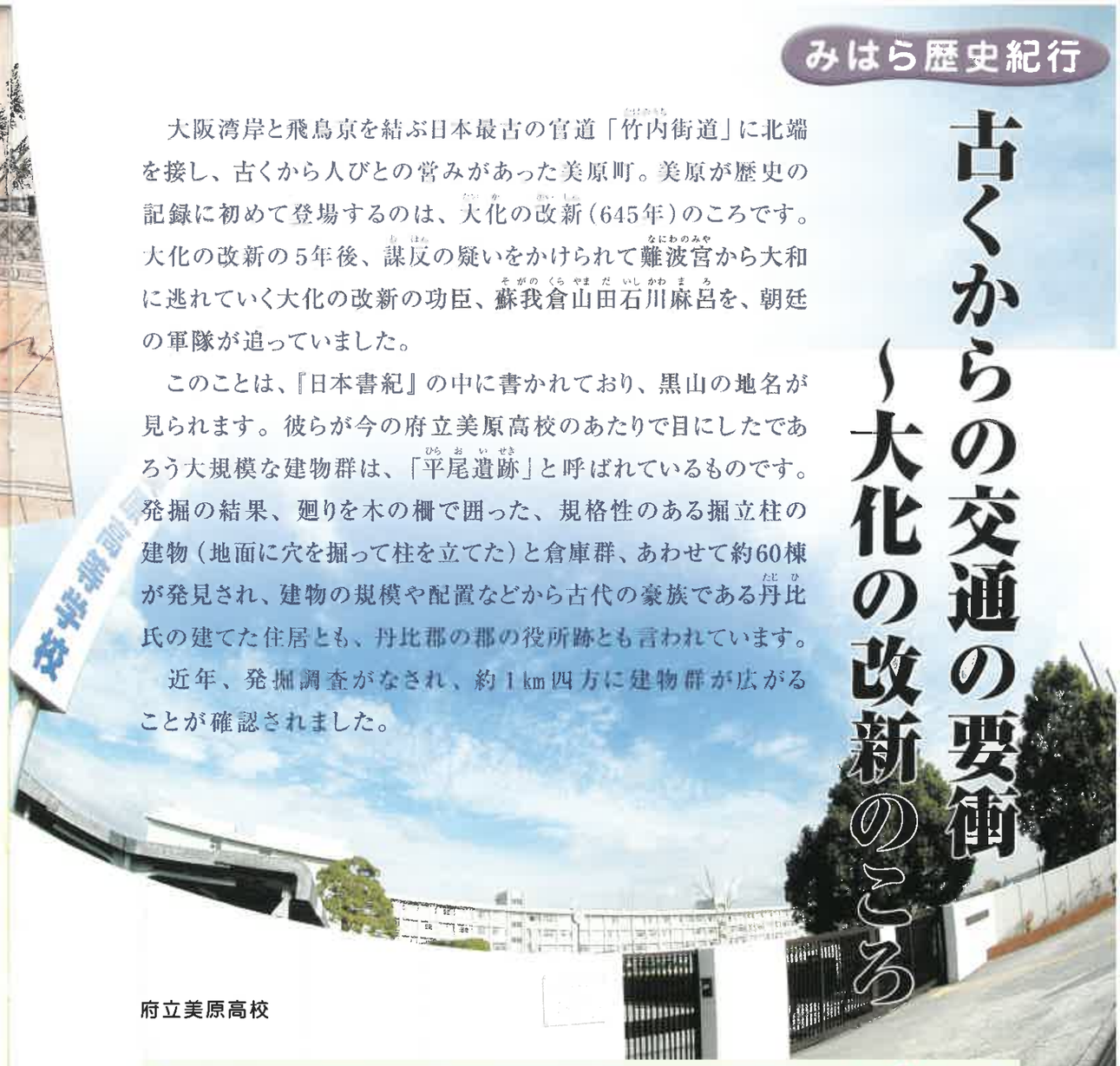
美原町は、古くは日本書紀に黒山の地名が残されており、現在の黒姫山古墳あたりと推測されています。私が子どものころ、古墳周辺は樹齢百年前後の松が生い茂っていました。昭和19年ごろ、松根油の採取作業中に、竪穴式の石室が偶然見つかりました。古墳はすでに盗掘の跡がありましたが、昭和23年9月に発掘調査が始まり、私も参加しました。この発掘は考古学上の重大ニュースで、日本中をかけめぐりました。また古墳の名称も、墓山では他と区別できないなど論議の結果、「黒姫山古墳」に決まりました。

古くからの交通の要衝 ～大化の改新のころ

大阪湾岸と飛鳥京を結ぶ日本最古の官道「竹内街道」に北端を接し、古くから人びとの営みがあった美原町。美原が歴史の記録に初めて登場するのは、大化の改新（645年）のころです。大化の改新の5年後、謀反の疑いをかけられて難波宮から大和に逃れていく大化の改新の功臣、蘇我倉山田石川麻呂を、朝廷の軍隊が追っていました。

このことは、『日本書紀』の中に書かれており、黒山の地名が見られます。彼らが今の府立美原高校のあたりで目にしたであろう大規模な建物群は、「平尾遺跡」と呼ばれているものです。発掘の結果、廻りを木の柵で囲った、規格性のある掘立柱の建物（地面に穴を掘って柱を立てた）と倉庫群、あわせて約60棟が発見され、建物の規模や配置などから古代の豪族である丹比氏の建てた住居とも、丹比郡の郡の役所跡とも言われています。

近年、発掘調査がなされ、約1km四方に建物群が広がることが確認されました。



府立美原高校

『竹取物語』にも登場?! ～歴史に名を残す丹比氏の人びと～

日本最古の物語といわれる『竹取物語』で、かぐや姫の5人の求婚者は、藤原不比等をはじめ、実在の高位の人物が擬せられていますが、その一人として、名前があがっているのが丹比氏の一族、多治比（丹比）真人嶋です。嶋の嫡男である多治比真人池守は、平城京の造営長官として、奈良時代の黎明期に活躍した実務型の高官でした。池守の弟、県守は遣唐使のトップである押使を務め、唐の皇帝・玄宗にも優秀さを認められながら、帰国直前に客死した日本人留学生　井 真成を抜擢した人物として、最近新聞などで話題になりました。また、一族の多治比真人三宅麻呂は催鋳銭司に任命され、歴史的な和同開珎の鋳造の総責任者として大任を果たしています。

菅生神社

北野天神縁起絵巻

現在の菅生地区のあたりでは、中臣氏の一支族の菅生氏が勢力を誇っていました。菅生神社は、当初、天児屋根命を主祭神としていましたが、天神信仰が盛んになるにつれ、室町時代には、菅原道真を主祭神とする神社に変貌しました。この神社も延喜式内社（ひとことコラム参照）で、宝物に『北野天神縁起絵巻』〔応永34（1427）年奉納〕などが残されています。

丹比廃寺跡は、白鳳時代のものと思われる丹比氏の氏寺で、塔跡の基壇部分が現存し、その大きさから、かなり大きな伽藍を擁していたと推察され、出土する瓦には特有の文様が施されています。

丹比廃寺塔跡

丹比神社

丹比神社は、当初は、多治比氏の始祖宣化天皇を祀ったとされますが、この地が反正天皇（多遅比瑞歯別）の産湯井戸の伝承の地であることから、現在の祭神は瑞歯別命とされています。延喜式内社（ひとことコラム参照）の一つで、拝殿に明治期の相撲の奉納額がかかっています。境内は広く、楠や桜などの樹木におおわれています。

ひとことコラム 延喜式内社

10世紀前半に編纂された『延喜式神名帳』に記載されている神社をいう。祈年祭奉幣を受けるべき2861社が国郡別に記載されており、当時朝廷から重視された神社であることを示している。

和同開珎のころ ～奈良時代の美原

阪和自動車道部分で出土した鋳造関連遺構

和銅元（708）年2月、催鋳銭司が設けられ、初めて「和同開珎」（ひとことコラム参照）というお金が作られました。催鋳銭司とは、鋳銭司を設置する準備のための宮司です。翌年、和銅2（709）年8月には、河内鋳銭司が設置され、河内鋳銭司は、和同開珎鋳造の中心として活動したと伝えられています。和同開珎の鋳造の総責任者に任命されたのは、多治比氏一族の多治比真人三宅麻呂でした。多治比真人三宅麻呂は、当時従五位上の身分にあり、政治の中枢にあった藤原不比等が経済政策の中心に据えた銅銭鋳造の仕事を推進する優秀な官僚であり、武蔵国秩父郡で多量の和銅が発見された折に、朝廷から採銅使として武蔵国に派遣された実績がすでにありました。

『続日本紀』和銅元年二月条

甲戌、始置催鋳銭司、以従五位上多治比真人三宅麻呂任之、

『続日本紀』和銅二年八月条

乙酉、廃銀銭、一行銅銭。太政官処分、河内鋳銭司官属、賜禄考選、一准寮焉。

ひとことコラム
和同開珎

日本で最初に作られたと思われる貨幣。武蔵国秩父郡から自然銅が産出し、朝廷に献上されたことから、貨幣の鋳造が可能になった。丸い貨幣の中央に開けられた四角い穴の上下左右に4つの文字を配するというデザインは唐の様式をそのまま模倣したもので、その後近世に入るまでの貨幣に踏襲されている。

そのころ、美原にも銅の鋳造工房が存在していました。現在の阪和自動車道の黒山と太井地区の境界あたりにある「太井遺跡」から、奈良時代に鋳造を行っていたことを示す遺物が、大きな穴の中から数多く出土しました。これらは、できあがった製品ではなく、いずれも製作工程で使用する、平城京出土の坩堝や鞴羽口など、鋳造に関する道具類の遺物であり、平城京の京内にあった鋳造工房で出土した遺物と同じ特徴を備えていたことから、太井遺跡と平城京とは、非常に密接な関係があったと考えることができます。太井遺跡からは、和同開珎も一枚出土しています。また、統一新羅印花紋陶器も出土しており、朝鮮半島との関わりを知ることができる貴重な資料となっています。鋳型が発見されていないので、太井遺跡で何が鋳造されていたかは明らかではありませんが、この美原で奈良時代から、銅の鋳造が行われていたことは疑いありません。

統一新羅印花紋陶器（太井遺跡）

和同開珎（太井遺跡出土）

黒山廃寺は、白鳳時代創建時の軒瓦が出土することから、寺があったことは確実ですが、寺院や伽藍配置については、いまだ不明のままです。

『延喜式』という書物の中で、河内国の特産品として、「黒山筵」の名が見えます。この黒山筵は、天皇の代替わりの最も重要な儀式である「大嘗祭」の最も重要な部分で使用されたと伝えられているものです。

黒山廃寺の軒瓦

現在の神殿池周辺

また、8世紀中ごろ、称徳天皇が紀伊へ行幸した帰り、丹比の地で行宮が設けられたことが、記録に見えます。この「丹比行宮」は、現在の小寺地区の神殿池のあたりに設けられていたらしく、今に残る大饗という地名は、その時に饗宴が行われたことからつけられたものと伝えられています。

高野山詣でのみち
～平安・鎌倉時代の美原

弘仁7(816)年、弘法大師(ひとことコラム参照)が高野山に金剛峯寺を開基すると、貴族たちの間では高野山に参詣することが流行りました。東・西・中の3つの「高野街道」が整備され、美原には中高野街道が南北に、それも上と下の2本もの街道がとおっています。平安時代後期の覚行法親王の『高野山参詣日記』には、松原の地に宿泊したことが記述がありますので、美原の地をとおって、高野山に至ったと考えられます。

この覚行法親王の求めに応じて、高野山で法要が行われたとき、玄信という黒山出身の僧も参加しました。やがて玄信は、金剛峯寺の第26代検校という役職に就きますが、仁安3(1168)年、金剛峯寺と大伝法院が争った事件に連座して、壱岐に流罪となってしまいます。後に許されて高野山に帰ったのですが、寺の一般大衆によって高野山を追われ、失意の内に亡くなったと伝えられています。

ひとことコラム
弘法大師(空海)

31歳で遣唐使として渡った中国から、密教の「真髄」を持ち帰り、真言宗の礎を築いた。弘仁7(816)年、高野山の神聖な地形に着目、嵯峨天皇より高野山を下賜され、以後、高野山の金剛峯寺を中心に布教活動を展開した。また、唐から持ち帰った当時の科学技術を駆使して、故郷讃岐に満濃池を作り、日本で最初の庶民のための学校、綜芸種智院を京都に開設するなど、社会活動にも熱心に取り組むとともに、書道でも非凡な才能を発揮、後に嵯峨天皇・橘逸勢と共に三筆と呼ばれた。承和2(835)年、高野山で入定。延喜21年(921)、醍醐天皇は空海に「弘法大師」の諡号を贈り、遺徳を讃えた。

法雲寺

法雲寺の前身は、弘法大師の創建と伝えられる長安寺で、七堂伽藍が完備した真言宗の大きな寺院でしたが、元和6(1620)年に、狭山池の堤防が決壊し、ことごとく流失して廃滅しました。

寛文11(1671)年、僧宗月が霊夢を見て、地中から観音様を掘り出し、草庵に安置して多くの人々の信仰を集めていましたが、翌年、村人とともに慧極道明禅師に来住と伽藍の建立を請い、現在の地に本山万福寺(宇治市)の様式を模して法雲寺が建立されました。

また、延宝元(1673)年、官許を得て、大宝山法雲寺と号し、全盛時代には四十八堂伽藍があり、小万福寺を思わせ、全国津々浦々の人々が帰依を受けていました。

法雲寺　三千仏

広い境内には、中国風の山門、天王殿、本堂、開山堂、鐘楼、耀先殿、方丈などがあり、本堂には、本尊である釈迦如来、脇侍の薬師、阿弥陀仏が安置され、その背後に今津浄水が寄進した木彫りの三千仏が、金色さん然と並んでいます。近くの人は、「ほんじんさん」と呼び、盂蘭盆施餓鬼法要は、「ほんじんまいり」と言われ、親しまれています。

この頃、安芸の宮島・厳島神社に納めるお経の書写に、美原の4つの寺と松原の2つの寺の僧が従事したという記録があります。4つの寺のうち、長和寺は、小寺地区の平松寺のところにあったとも推測されていますが、他の3つの寺についてはよくわかっていません。

平安時代の末期から室町時代の初めにかけて、鉄や銅を溶かして、鍋や釜などの生活用品や梵鐘などを鋳造する「河内鋳物師」と呼ばれる鋳造技術者集団が美原の地を本拠地として、全国にその名声をとどろかせました。現在は、「鍋宮大明神」・「日本鋳物師発祥の地」の石碑が残されています。

中世の鋳造技術者集団

河内鋳物師

河内鋳物師が造った金剛輪寺梵鐘（滋賀県・秦荘町）

近江国愛智郡
金剛輪寺
奉鋳造鐘一口
右去承元雖造之今乾元所鋳改也
夫犍槌一打三千之衆雲集霜鐘
三振四生之苦氷銷般若之標道場之
主只在鳴鐘乎　天長地久結縁尊
卑成以御願満以志願矣
（一三〇三）
乾元弐年癸卯四月十五日
大工河内国丹南郡黒山郷河内助安

鉄や銅などの金属を溶かして鋳型に流し込み、鋤などの農耕具、鍋・釜などの生活道具から、梵鐘・仏像にいたるまでの製品を鋳造した技術者が、鋳物師です。彼らは、さまざまな鉄鋳物を鋳造する技術者であるとともに、朝廷に鉄燈籠を献上し、諸役の免除・往来の自由・関所の通行料免除などの特権を得て、鋳物だけでなく、その素材や米・絹などの売買をも行っており、今で言う総合商社的な活動を行っていたことが知られてきました。

美原町内では、すでに8世紀初頭に銅を材料とする鋳造工房が営まれていたことは、これまで振り返ってきたとおりです。

高松宮家伝来禁裏本『職人歌合絵巻』より

平安時代末期から室町時代にかけて、大保を中心とする河内国丹南郡は、鋳物師が集まり住んでいたところで、「大保千軒」と呼ばれるほどの賑わいを見せ、河内鋳物師が造りだした多彩な作品によって、その高い技術が実証されています。

高徳院　阿弥陀如来座像（鎌倉大仏）

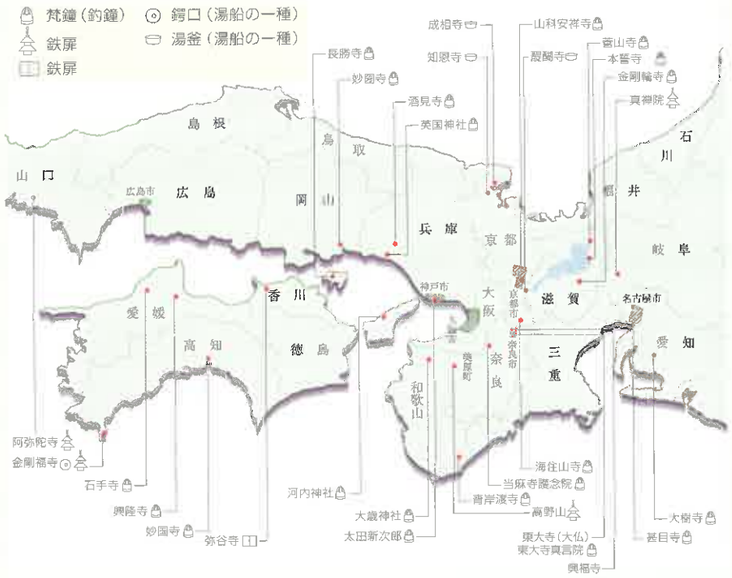
河内鋳物師は、鎌倉時代に再興された東大寺の大仏鋳造にも、中国人とともに参加し、さらに鎌倉の大仏や梵鐘なども手がけました。全国各地の梵鐘に、河内鋳物師の名を刻んだ銘文が見られ、当時の彼らの活躍がうかがえます。

また彼らが作る鍋は、当時「河内鍋」として知られ、高級品の地位を築いて、京の都でも珍重されていました。その技術力が全国に知られると、各地へと出かけていくことが多くなり、次第に河内国を離れて地方に土着し、鋳物技術を伝えたと言われています。鎌倉に幕府ができた時には、丹治姓の鋳物師が移住をし、その一人、丹治久友は、鎌倉大仏の名で知られる高徳院の大仏の鋳造に参加しました。また、港を中心とした海上輸送を行うために、堺へ移住し、堺の金属加工に大きな影響を与えた鋳物師たちもいました。

近年の発掘調査で、8世紀代の鋳造機構や13世紀代の梵鐘鋳造遺構などが相次いで発見されるなど、作品や伝承、記録などでしか知ることができなかった河内鋳物師の活躍の姿が、より具体的に明らかになってきています。

鋳型出土状況　真福寺（黒山）遺跡

梵鐘鋳型　真福寺（黒山）遺跡出土

河内丹南　鋳物のおこり　やがエフ
今じゃ高岡　金屋町　エー
火の粉吹き出す　あの火のもとにゃ　やがエフ
いとし主さん　タタラ踏む　エー

これは「やがえ節」という富山県高岡市に伝わる作業歌で、鋳物に使う地金を溶かす溶解炉に風を送り込む「タタラ」と呼ばれる大型の足踏み式送風装置で作業するときに、調子を整えるために歌われたものです。